東京あさぼらけ

校訓
至誠勵業
剛健成風
操守堅固

発行所
東京福中・福高同窓会広報委員会
〒160-0023
新宿区西新宿7丁目20番地16号
ダイカンプラザシティⅡ304
原口法律事務所内
TEL　03-3361-9633
FAX　03-3369-6664
Eメール　fukkou@attglobal.net

《活躍する同窓の仲間たち》

同級生同士、青春の夢実らせる！

〝神の手〟を持つ移植医療の先導者と国際的オペラ歌手

高校18回の藤堂省さんと山口俊彦さん

今回は、福高在学時代から共に切磋琢磨を続け、それぞれの夢を実らせている仲良し同級生を紹介します。高校18回（昭和41年卒）の〝神の手〟を持つ移植医療の先導者といわれる北海道大学医学部第一外科教授、藤堂省さんと、心に響く重厚なバスの歌声と幅広いレパートリーを持ち国内外を舞台に活躍しているオペラ歌手の山口俊彦さんです。

早朝5時に登校してピアノ練習

高校3年間ずっと同級だった2人をとりわけ結びつけたのは早朝の教室での出会い。「家にピアノがなかったので、学校に午前5時ごろ登校して授業が始まるまで音楽室でピアノの練習をさせてもらっていた」山口さんと始業の1時間前には教室の掃除をして勉強していた藤堂さんは、お互いを意識し、将来を語り合うようになったのです。

進路を意識する2年生の後半ごろは、藤堂さんによると「山口君の方が医者になりたいと言っていたように思う。僕は中学(和白中)で文芸部だったこともあって、新聞記者や弁護士、政治家に関心があった」とか。

それが、3年生になると山口さんは「オレしか歌えない声で歌いたい」と東京芸大を目指すことを決め、藤堂さんは「人助け、人の命を救う仕事をしたい」と九大医学部に志望を定めたのでした。

その時の2人が交わした言葉が「歌と医学と道は違うけど、将来2人でドイツに行って同じ下宿で勉強しよう」。

日本の移植医療の前進に向けて厚生省(当時)で記者インタビューに応じる藤堂さん(97年９月。共同通信社提供)

末期患者との出会いが進路を決める

その後、藤堂さんは九大第1外科にいた25歳の時、医師としての進路を決定づける患者と出会うことになります。藤堂さんが医師として最初の死亡診断書を書くことになったその患者は、末期の肝不全。間もなく32歳の若さで逝った患者の妻は初めての出産を控えていて、夫の死に半狂乱になりながら、「どうして主人を助けられなかったの」と藤堂さんに訴えたのです。

当時まだ肝臓外科が今のように発達していなかっただけに、「いつかこうした重症の患者さんを助けられる外科医になろう」と、臓器移植を始め世界の先端医療をリードするアメリカへの留学を決意したのでした。

そして、36歳で渡米するまで、医学はもちろん、米軍基地に出掛けては英語の実践勉強を積むなど〝その日〟に備え、84年1月、世界初の肝臓移植手術を手がけたスターツル博士のいるピッツバーグ大学外科の客員研究員になったのです。

遅れた日本の移植医療の道を切り開こうと帰国

藤堂さんはすぐに頭角を現し、手術の腕はスターツル博士が「難しい手術はトードーにやってもらえ」と語ったというほど。

94年には同大の教授となり、97年に北大に迎えられるまでの在米12年間に執刀した肝臓移植は優に１０００例を超しています。

先端医療の中心アメリカにあって世界の移植医療をリードしてきた藤堂さんが移植医療では「途上国」といわれる日本に戻ったのは、胆道閉鎖症の子どもを持つ日本の母親から届いた、日本国内では移植手術を受けられないことを訴える一通の手紙でした。

実際、日本からの留学生を預かっても、帰国した彼らが移植手術を待望している患者のために腕を振るう機会がないという状況が続いており、日本の移植医療のこの困難な道を切り開くのは自分しかいないと決断したのです。

その藤堂さんが先導者となって、日本の移植医療は、

（次のページに続く）

ドイツでの演奏会後のパーティーで熱唱する山口さん

三野会長を偲ぶ

高潔な〝道づくりの達人〟でした

副会長　馬場　一廣（高３回）

当会、三野定会長は去る11月29日、肺ガンのため83歳で逝去されました。慎んでご冥福をお祈り申し上げますとともに、三野会長を偲びつつ、東京福中・福高同窓会の更なる飛躍と発展を願わずにいられません。

三野会長は福中から旧制福高、九大と進まれ、建設省で道路建設の専門家、責任者として活躍。近畿地方建設局長を最後に退官、日本道路公団理事・技師長、さらに住友建設会長を経て相談役をされていました。

その三野会長を語るとき、「道づくり」という言葉が真っ先に頭に浮かびます。一つは国内外での実際の道路建設であり、もう一面は業界団体をはじめ県人会や同窓会など組織・団体の道（目的・目標）づくりの優れたリーダー、道しるべ役としてです。

アジア、アフリカ、中近東各国の発展を願って現地で道路建設を指導されたときの熱い想いは、住友建設時代にかかれた2冊の著書『海の彼方の道づくり』（昭和63年）『続海の彼方の道作り』（平成7年）を通して知ることができます。かつて、竹下登元首相が三野会長に「君はヨコメシができるそうですね」といったというエピソードを聞きました。ヨコメシは、いわゆる「竹下語」で、食事をしながらでも外国人と対応できるほどの語学力の持ち主という意味だそうです。三野会長はきっと、道路建設と同時にもう一つの道づくりを堪能な英語で語りかけていたのだと思います。

会長のこうした活動は世界的に高く評価され、1991年にはIRF（国際道路連盟）の「マン・オブ・ザ・イヤー」に選ばれたほどです。

また、会長はご多忙のなか、同窓会役員会にも積極的に出席され、私たちに深く高い識見からお話しされていたのが強く印象に残っています。1月23日にホテル・オークラで開かれた住友建設の「お別れの会」でも、さまざまな分野の皆さんが三野会長のお人柄と思い出を懐かしんでいましたが、老若男女を問わず親しくされ、そして尊敬されていた実に幅広い人格と高潔なお人柄の持ち主でした。

そうした人生の達人だからこそ、多士済済の私たち同窓会の会長として抜群のまとめ役ぶりを発揮されたのだと思います。

同窓会活動について三野会長は、21世紀を迎えた昨年の本紙の会長あいさつで「何かを共有する者が集まって語らい、語らいの中に自ら生きがいを見つけ、互いに励ましあう、それが同窓会です」と書かれ、最後に「新しい世紀に『何を期待するか』というよりも、『なにをするか』と考えるべきかもしれません。本年が皆さんにとって、佳い世紀のスタートの年になることを祈っています」と結んでおられます。

福中時代、剣道で鍛えた三野会長の凛としたお姿にお会いすることはもうかないませんが、私たち全員、その道づくりの心と道しるべを引き継ぎ、努力して参ります。どうぞ、やすらかにおやすみください。

ようやく動き出したのです。

「進取の気性に富む北海道で欧米に負けない医療システムと若い外科医を育てたい」と、福高ではバレーボール、九大ではラグビーで鍛えた体で、さらなる挑戦を続ける藤堂さんです。

晩学の苦難を克服し　歌声は輝く

一方、小・中学（箱崎中）と剣道少年だった山口さんは自ら「僕は晩学」と語るように、歌との出会いは福高に入ってから。同級生の溝上哲思さんに「コーラス部に入りたいけど女子ばかりなので、ついて来てくれ」と頼まれたのがきっかけでした。

その時、3年生の先輩、小野塚満郎さんに「お前、良い声してるよ」と言われ、生まれて初めての〝ハモル〟経験にすっかり魅了され、歌漬け、ピアノ漬けの高校生活が始まったのです。

当時、コーラス部の顧問は一昨年亡くなられた江口保之先生。その江口先生を通して、先輩で音楽界で活躍中だった吉岡巌さんから「声楽をやってみる気はないか。2、3年自分の所で勉強すれば芸大に入れるかもしれない」と言われ山口さんの心は固まったといいます。高校3年の夏休みのことでした。

以来、芸大受験に向けての浪人生活では、ピアノとソルフェージュが弾けない、採れない、歌えないなど晩学ゆえの「苦難の連続」（ご本人の弁）。芸大では大学院に不合格になった経験も。

しかし、文化庁オペラ研修所第1期生、文化庁在外研修員としての4年間のイタリア留学といったチャンスをたゆみない努力で手にした山口さんは、着実に「自分しかできない、自分だけに与えられた自分の存在、その責任の重さと輝き」（山口さん自身の表現）を身につけていきました。30代初めには、イタリア・パルマのオペラコンクールなど国際的なコンクールに次々と入賞し、83年からは西ドイツ（当時）カイゼルスラウテン市プファルツ州立劇場とシリアスバスとして2年間契約するなど活躍の場を広げていきました。93キロの体と晩学の苦難を克服した努力がかなでる歌声は高い評価を受けています。

イタリアで家族ぐるみの再会を果たした藤堂さんと山口さん

85年、帰国後も97年の新国立劇場柿落とし、エディンバラ国際フェスティバル・オープニング公演では、めったに褒めない新聞評論で高い評価を得た山口さん。演じる力はもちろんですが、オペラ界への情熱の深さは並大抵ではありません。

オペラに対する理解のまだ浅い日本で、もっとみんなが簡単にオペラを見られるようにしたい、オペラを根づかせたいと、自宅のある大田区で「大田区民オペラ協議会」を立ちあげ、この10年来、市民レベルからのオペラ振興に取り組んでいます。

今年の公演は、10月19、20日、大田区民ホールでヴェルディ作曲「ナブッコ」。連絡先は、03-3757-3965の山口さんまで。

※

〝神の手〟を持つと尊敬を集める医師・医学者と、国際的に活躍するだけでなく、同窓会総会や母校を訪ね親しみあふれる歌唱指導や公演もするオペラ歌手――その2人を育んだ母校の教室での青春の日々。人生の出会いの妙を〝演出〟した母校への想いを新にさせられる2人のエピソードです。

蛇足ながら、2人のドイツでの下宿生活の夢は実現しませんでしたが、10数年前、イタリア・ミラノでの楽しい家族ぐるみでの再会を果たしたそうです（写真）。

福中・福高同窓会とペシャワール会

ますます必要とされる中村哲さんの働きをしっかりサポートしていこう

乃美　吉江（高８回・在福岡）

福岡在住の乃美吉江さん（高８回）からパキスタン、アフガニスタンで医療活動や井戸掘り、食料支援活動を続けている中村哲さん（高17回）とペシャワール会の取り組みへの理解と支持を訴えるお便りをいただきましたのでご紹介します。

「同窓会が率先しなければ」の思いで

平成３年の春、西日本新聞の記事で中村哲さんのことを知った時の感動は、今でもはっきりと思い出すことができます。

アフガニスタンとパキスタンの国境北西辺境州において、難民のための医療活動を7年間も続けている福岡出身の医師がいるという記事でした。後日、中村医師を支えているペシャワール会の存在と、彼が福高出身であると知った時、大変不思議な気がしました。

それまで、私が知る範囲の同窓生の中で、中村さんたちの取り組みが一度も話題にならなかったからです。このようなことこそ、同窓生が率先して支援しなければならないのではないかと思いました。しかし、かと言って私一人で立ち上がり皆さんに呼び掛けるほどの勇気もなく、忸怩たる思いを抱きつつ数カ月が過ぎました。

診療活動を続ける中村哲さん

ちょうどその頃、平成３年５月発行の前期「朝ぼらけ」紙上に初めて「ペシャワール便り」として中村さんの文章が掲載されました。これが私の気持ちを一歩前進させてくれました。ペシャワール会とはどのような会なのか、自分で確かめたいと思い大名町にある事務所を訪ねました。やはり想像どおり同窓生は少なく、10数名の事務局ボランティアの中にただ１人25回の藤野洋子さんがいただけでした。

支援者（会員）は全国に１５００名ほどでしたので、その中には同窓生もいらっしゃったかもしれませんが……。

「勝手にしえん会」など広がる同窓生のサポート

あれから10年、個人会員は４０００人余りになり、その１割ほどが同窓生という現状です。毎年６月の福中・福高同窓会総会では、「勝手にしえん会」（高17回）の方々を中心に募金活動が行われるのが恒例となりました。「待っとったバイ!!」「頑張ってください!!」と激励の言葉とともに数分で募金箱はいっぱいになります。

高校３回の声楽家、山本健二先輩のお申し出で盛大なチャリティコンサートが開催できたことなど、様々な形での同窓生の支援はこの10年間枚挙にいとまがありません。これも「朝ぼらけ」編集長の今津勝行先輩（中25回）が、ペシャワール会へずっと変わらぬ熱い心を持ちつづけ、毎号、会のために１ページを割く努力をして下さっているお陰だと思っています。

ペシャワール会理事として高17回の白石正彦さん、西川ともえさんががっちり支えて下さり、実働ボランティアとしては、前述の藤野さんに加え小宮康子さん（8回）、浜田孝文君（50回）と随分賑やかになりました。

あの空爆の最中も休むことなく活動

とはいえ、一般的にはまだまだ福岡市内でも知る人の少ないささやかな会でした。あの事件が発生するまでは……。

全国の人々からの問い合わせ、マスコミの取材、様々な団体からの講演依頼と鳴り止まなかった事務局の電話も、さすがに12月に入ると落ち着いてきました。

病院の前で診療を待つ患者さんや家族たち

信じられないことかもしれませんが、激しい空爆の中もペシャワールの病院は勿論のこと、アフガニスタンの診療所は休むことなく医療活動と食糧援助を続けていました。これも一重に現地を熟知する中村さんの冷静沈着な判断と決断力、卓越した行動力によるものです。

現地からの情報は、未曾有の旱魃と、それに伴う飢餓でポリオ、結核、マラリア、赤痢などの疫病が蔓延し、不安定な世情の中で精神疾患患者も多数発生していることを伝えています。

ますます必要とされる中村さんの働きを、私たちはしっかりサポートしていかねばとも思います。どうぞ皆様も、今までにも増してご支援くださいますようお願いいたします。

経過報告のみに終わりましたが、何故多くの人が18年もの間、中村哲さんを支えることが出来たのか、その答えは中村さんの次の著書の中にあります。一読をお勧めします。

▼アフガニスタンの診療所から　１１００円
▼ペシャワールにて　１８００円
▼ダラエヌールへの道　２０００円
▼医療は国境を越えて　２０００円
▼医者井戸を掘る　１８００円
▼丸山直樹著　ドクター・サーブ（中村哲の15年）送料１冊に付き350円。冊数により異なりますが、500円くらいまでです。

本についてのお問い合わせは　092-541-8897　乃美さんまで。

※

4月19日の同窓会総会会場に募金箱

4月19日（金）の同窓会会場に中村哲さんとペシャワール会の活動支援のための募金箱を置かせていただきます。ご協力のほどをお願いいたします。（編集部）

としなよんっぱ

同窓会ゴルフ愛好会「福友会」から
若手諸君 ぜひとも参加を！

福友会ビギナー
世利　卓郎(高３回)

諸先輩の話によると、今から丁度6年前、同窓会諸氏の絆を強めるとともに皆の健康と親睦を兼ねてゴルフをやってはと、この会は発足した由。とりあえず発起人（高4回生）の音頭で名前を「福友会」とし、開催は年1回では物足りないので2回にしようということになり、毎年5月、11月の開催となった旨聞きました。

それから今日まで回を重ねるごとに参加者は徐々に増え、また女性の参加もあって、現在では5～6組のコンペが開催されるようになり、ゴルフを楽しむ人たちには親睦を深める良い会に成長してきています。

2年程前に東京福中・福高同窓会より「会長杯」として立派なカップをいただき、これもまた皆の励みとなっています。

会場についてはその都度、幹事が決めることとなっていますが、現在のところ交通の便などを勘案して13回の今日まで立川国際カントリー倶楽部を使用しています。

その第13回福友会ゴルフコンペが平成13年11月15日、好天に恵まれて開催されました（写真）。5月のコンペでは高2回の案浦傳氏が、そして今回も高2回の師岡一夫氏（写真右側）が優勝と、参加者の中でも最も高齢者に2回連続して名を成さしめています。

先輩の皆さんは、元気だし若々しくはつらつとプレーされています。若手諸君、ぜひこの福友会に参加し、優勝カップを先輩の手より取り戻そうではありませんか。

また、東京福中・福高同窓会で、ゴルフのみならず囲碁・将棋・釣り・麻雀等々趣味を持つ方々が集い、それぞれに会を結成し親睦を深めるようになればと思います。

※

「福友会」への参加申し込みや問い合わせは、世利卓郎さん（〒157－0061世田谷区北烏山3－13－22－105）まで。

妻と愛猫を伴ってスペイン生活１年記
海外生活やって見るもんだ!!
財産となる仲間がいっぱい

松島　成企（高７回）

もう5年前になる。60歳の定年を自ら決め、とりあえずはスペイン語の勉強をと、家内と愛猫を伴ってバルセローナ郊外に5年契約で住まいを借りた。

5年ともなると、ただ単に生活するというだけでは芸がない。現地で何かお役に立つことが何かないかと考えていた。さいわい数年前から日本語教師の勉強をしていたので、それが役に立てばと考えていた。

ちょうどその時、バルセローナ郊外の小さな街カネット・デ・マールに日本センターがあることを知った。どんな活動をどの程度しているのかという詳しい情報はなかったが、少なくとも日本センターと名がつく以上、何かお手伝いすることもあるだろうと漠然と考えていた。

日本センターのメンバーの中に彫刻家の外尾悦郎氏（高25回）の名前を発見したのは、それからしばらくしてである。外尾氏がサグラダ・ファミリア教会で仕事をされているのは先の「朝ぼらけ」の記事で知っていた。

日本センターのこともカネット・デ・マールの住宅事情のことも、外尾氏に聞くのが早道と、失礼を承知でコンタクトを取った。

外尾氏は、快く応じてくださった。本当に親切な方である。家探しを目的にバルセローナに出掛けた1週間のうちに、お会いすることができた。

そして、不動産屋を紹介していただき、日本センターにも案内されて、その活動状況も説明していただいた。

それから約1カ月後、長い砂浜に面した5階建てのビソ（日本流に言えばマンション）の4階に居を構えた。広さ約120平方㍍、4ベッドルームに広い居間とキッチン付きである。浴室も2つ付いている。家賃は月約4万円。

広いベランダからは180度地中海を望め、毎朝左約20度の水平線からは太陽が昇る。かねてより「一度は海の見える白い家に住みたい」と思っていたものが、白い家ではないが地中海という思いがけない形で実現したわけである。

しかし、「住む」という現実はかなり厳しいものがあった。その一番は、買い物である。東京にいた時は週に1度まとめ買いして車で運んだ。町外れにあるビソから市場やスーパーまでは歩いて20分程度かかる。

果物がなくては生きていけない妻にとっては、かなり重い荷物になってしまう。私の背中のリュックが頼りで、月曜から金曜日まで週5日スペイン語学校へ通う学生親父の土曜日の仕事である。

土曜日は暇なので日本センターのお手伝いも、と考えていたのも甘かった。第一、日本センターは何も活動していなかった。外尾氏によれば、もともと市長さんが日本企業の誘致になれば街の活性化に繋がると安易に考えて始まったことで、十分な戦略と準備があったわけではなかったそうである。

それに加え、バルセローナを拠点にヨーロッパ一人旅しか楽しみのない妻には、それ以上のカネットに暮らす意義は見出せなかった。そして、10カ月を過ぎる頃から「もう幾つ寝ると帰れるか」と冗談交じりに歌うようになった。

5年の計画を1年で切り上げたのであるから、挫折といえば挫折かもしれない。しかし、1年間スペイン語を勉強し、帰国後も細々とそれを続けているお陰で、インターネットを通じて老若男女たくさんのスペイン語仲間ができ、それが今では大きな財産だと思っている。

（ホームページにエッセイを載せています）
http://www8.justnet.ne.jp/~shigeki_matsushima/

"包装紙"は変わったけれど 胸の奥に生きる福高カラー

林田　スマ（高18回・在福岡）

「前略　懐かしいものが出て来ましたので一部お送り致します。草々」

同級生の押渕英尚さんから届いた封筒の中にはなんと38年前の『福高』号外のコピーが入っていた。

昭和38年3月20日発行の福岡高等学校紙号外には入学合格者618名の名前が並んでいる。その名簿は一気に私の心を昔へと引き戻してくれていた。目の前に並ぶ懐かしい友人たちの名前、胸をワクワクさせながらまず自分を探す。あった！6段の8行目に香椎中学校の仲間たちの間にちゃんと私の名前がある。あの友、この友、その名前の向こう側に制服姿の高校時代の思い出が次々広がる。白いブラウスに細いリボン、紺のスーツ姿、憧れの制服の中で身も心も踊っていた。

あの日のいそいそと、とても嬉しそうだった母の顔を忘れることができない。浮足立って集まった体育館でみんな緊張しながら笑っていた。あの幸せのスタートラインは太文字で残っている思い出のひとつだ。

福高生活、それは人生の中でぐんぐん伸びる若葉のようなひと時だったと思う。共に力を合わせること、競い合うこと、泣いて笑って怒ってみたり、感動や思考することなどいくつもの出来事が若い体の中を風のように駆け抜けていった。人生の岐路に立ちすくみ悩むことも多かったけれど、それが濃い青葉への成長の過程だったのだと思う。

思い出に浸っていると久しぶりにあの頃の日記帳を読み返してみたくなった。大学ノートいっぱいに広がったその文字は時に太く、そして細く、まるで私の心の糸のように感じられる。

「私はがんばろ」「志望大学に入って素敵な大学生になる」「将来マスコミの仕事をしてみたいなあ」―そんなことを書き綴った頁いっぱいに私の負けん気の強さが写し絵のように残っている。福高で学んだ前向きの精神、友と築いた深い友情、強さと優しさのバランスも福高魂だろう。

過日、卒業35周年記念修学旅行をした。福高玄関前の記念写真の笑顔は皆丸く大きくなっている。しかし"包装紙"は変わっても中身は同じ。福高カラーは胸の奥に生きている。「福高生でよかった」。いつもいつもそう思っている。

※

今もなお持ち続けるその福高魂をバネ（糧）に現役フリーアナウンサーを続けながら、昨年9月の九大大学院人間環境学府修士課程の入学試験を見事に突破。4月から2年間学ばれるそうです。林田さんの健闘と福高魂に乾杯!!（編集部）

老舗料亭「女将」奮闘記

初めはパニックの連続 今は感謝の日々

三田　啓子（高22回）

高校を卒業して早くも30年が過ぎ、月日のたつのは早いものと痛感しています。福高在学中は、まさか自分が料亭の女将になるとは夢にも思わず、おさげ髪で多くの男子学生と一緒に、体育祭・文化祭・クラブ活動などに汗を流し、楽しく過ごしていたことが昨日のように思い出されます。

卒業後、短大時代の教授から紹介されたご縁で日本橋人形町の料亭へ嫁ぐようになったことも、今思えば本当に不思議な気がします。

料亭「濱田家」は、大正元年の創業で今年90周年を迎え、東京では老舗に入るお店です。もともとは江戸時代からあった芸者置屋の「濱田家」との縁続きで、その時代、伊藤博文をはじめ明治維新のそうそうたる元勲たちも客として名を連ねていました。

料亭の世界とは何の縁もない私が、そんな古いお店へ右も左もわからないまま、若女将として入りました。子供の頃から日本舞踊、茶道、お花など日本古来の習い事も好きでしたが、江戸時代から続く花柳界「葭町（よしちょう）」は、私にとって別世界でした。見るもの聞くものが初めてのことばかりで、芸者衆を集めての若女将披露の時は、それは艶やか世界に嫁いできたのだと実感しました。

初めはお座敷へ長く座っていられず、どうやってお客様のいらっしゃる部屋から出たらよいかと考えるだけでパニックになっていた日々の連続。子育てをしながら夜はお店のお勤めでした。よくやってこれたと自分ながら感心しています。

これもひとえに家族の支え、お客様からの励ましのお陰と思いますが、私自身にも接客業が生来合っていたのではないかという気がします。それに、短大卒業後、日本航空へ入社し、3年間の接客の仕事を通じて学んだことが大変役に立ちました。政財界をはじめ、色々な分野のお客様をお迎えし、満足していただけるように配慮することは大変でした。そんななか、お客様に励まされたり、教えをいただいたりで、自分も成長してきたように思います。

お客様の中には福岡出身の方や福高の先輩方もいらして驚くやら、お喜びになられるやらで、私が福岡出身というだけで結構話が盛り上がる時もありました。本当に周りの方に支えられ、今日の自分があることに感謝して日々を過ごしています。

それから20年が過ぎ、時代の流れとともに料亭の数が少なくなり、だんだん寂しくなってきました。国際化が進む今、こういう日本文化の継承も大切なことと思い、これからもいろんなことにチャレンジし頑張っていきたいと思っています。

卒業40年の今年、青春時代に戻って「ワイワイ楽しく」を企画

野田　宏（高14回）

昨年の関東地区の寿士会は、11月9日（金）の夜、代々木クラブ（新日鉄研修センター）で開きました。年に1回の開催でいつもは20名近く集まるのですが、今回は9名（男性6・女性3）と少々さびしい集いとなりました。

しかし、少人数ではあったものの、ビジネスマン、大学教授から主婦までそれぞれの立場からいろんな話題が出て、楽しくかつ充実した時を過ごすことができました。特に、9月にあった福岡の寿士会に参加して関東にもあるのを知って初めて参加した西克之さんが話の中心になって、海外（ドイツ、アメリカ）で駐在した時の経験談は興味深いものでした。

また、今の大学が抱える諸問題についての上原政治さんの話はビジネスの世界では聞けない内容であり、大学改革には、一般企業の人事評価システムを導入すべきといったところまで話が発展し、大いに盛り上がりました。

ところで、21世紀になったというのに日本の景気は低迷を続け、デフレスパイラルや失業問題で閉塞感がただよい、私たちが社会人となった昭和40年代前半とは全くの様変わりです。あの頃は明るい未来があり、高度成長時代に向けて共に築きあげようという若さと活力にあふれた時代でした。

今のこの事態を打破し日本経済再生のためには、構造改革を一日も早く成功させ、日本全体が元気を取り戻してほしいものです。私たちもまだ老けこまずに、社会に貢献できるように、もうひと踏んばり頑張らねばと思います。

今年は、昭和37年に福高を卒業してちょうど40年の節目に当たります。同窓会をさらに活発にしていくためにも、福岡寿士会と共同でイベントを企画しようとの話もあります。

（次のページ上段に続く）

今年は青春時代に戻ってワイワイ楽しくしたいので、一人でも多くの仲間が参加するよう心より願っています。また、この同窓会が、私たちの多くが間もなく迎えることになる定年後の人生をより充実したものにするための一助になればと願っています。

天文歴60年、しし座流星群を見ずに寝て「シマッタ！」

西山　峰雄（中学21回）

天文現象はただ1回しか起こらない、その時どんな曇っていても最後まで頑張らなければいけないというのが鉄則です。今回はこの鉄則を、昭和17年に日本天文学会に入って60年の私が破ってしまったのです。風邪をひいていたので、このへんでと思ったのが間違いでした。重ねて残念至極。

しかし、実は風邪のせいばかりでなく、喜寿を超えた私の目が、空を眺めても、特に流れ星のように流れる光が見えにくくなったこともあるのです。

そこで、10年前からは実際の星空よりも、天文の歴史、古星図などの資料集めと研究に力を入れています。日本に限らず、ビルマやカンボジア、タイ、インド、中国などの星座・星図を調べたり、資料集めをしています。

最近も和紙に描かれた8㍍×3.2㍍四方もある江戸時代の、朝野北水作の巨大星図の研究・保存のための模写に取り組んでいます。

そうした合間には、世界各地に〝日食観測遠征〟に出かけています。1987年9月の中国南通、88年3月のスマトラ島、91年7月のメキシコに続き99年8月にはイラン・イスファハンに皆既日食を見に行きました。写真はその時のもの（私は右から2人目）で、イスラムの女性もチャドルを少し上げての記念撮影です。

私がこんなに天文好きになったのは福中時代のこと。夏休みにやった太陽の黒点の継続観測で物理の井山先生に一等賞をもらったことで拍車がかかりました。

以来、会社時代には「日食を見に行くなら、会社を辞めていけ」といわれたり、妻に「給料をもらっていたのが不思議なくらいですね」と冷やかされたりしながらの長くて楽しい天文との付き合いが続いています。

最後にもう一つ。私がたくさん軌道計算をしたので小惑星6745番に「西山」の名前をつけていただいています。

夢追い続けて「打率４割」を達成！

池田　修治（高37回）

福高の3年間、私の中では野球部での「不完全燃焼」が今でも心に残り、また現在の私のエネルギー源になっています。当時は、ラグビー名門の福高において数少ない、野球部が輝いていた時でした。入学し、すぐに野球部に入部した私の目には、当時の先輩方はとても大きく映り、また同学年のメンバーも体が大きい者が多く、やっていけるか心配でした。その後チームは力をつけ、私が2年生の時（昭和58年）には、「あと1勝で甲子園」というところまでいきました。

しかし、私はバッティングに難があり、3年生でもレギュラーにはなれず、せめて試合に直接かかわりたいとの思いから3塁コーチャーをさせてもらうなどして最後の夏が終わりました。

3年間、野球をやり終えたものの、正直言って「達成感」は得られませんでした。それで、上手くもないのに、大学でも野球部に。同学年のメンバーは実力者揃いだったが、大学では誰も本格的な野球を続けなかったようです。私は、大学ではレギュラーになり、常時試合に出たもののやはり、貧打は克服できず、リーグ戦の打率は1割台を抜け出すことなく、そのまま4年間が終わったのです。

それから、あっという間に10年以上が経過した3年前の秋、仕事に余裕ができた時期があり、衰える一方の筋力のことは顧みず、高校時代、いや、もっと前から思っていた「打てるようになりたい」との思いが強くなり、地元の草野球チームに入団。毎週日曜日、自分より5～10歳若い連中と一緒にプレーするようになったのです。チームには元甲子園球児やノンプロ経験者もいてレベルは高いが、昨年はレギュラーで打率4割を達成したのです（しかし、1年に2回も肩を脱臼してしまったけれど）。

今野球を続けていることが生活に張りを与え、仕事にも家庭にもいい影響を与えています。高校時代に野球で「燃え尽きなかった」ことが、良かったのかもしれません。

富士の麓の不思議なご縁の同窓会

柴藤　勝也（高38回）

不思議なご縁があるものです。私は現在（社）日本建設機械化協会・建設機械化研究所に出向しています。職員66名と出向者11名の総勢77名中、福高卒業生が4名も在籍しているという、確率的にはなかなか珍しい状況となりました。「こらぁ、飲まないかんばい」となり、前日ささやかながら4人で同窓会をしました。

建設機械化研究所は、日本建設機械化協会の付属機関として昭和39年に設立。発足以来、「自らの頭で考え自らの足で調査し、自らの手で試験する」をモットーに全員が日本全国の現場を飛び回っています。研究所は静岡県富士市にあり、建設機械の走行コース、構造物の疲労試験機など、多様な施設を擁しています。

写真が4人の同窓会です。中央は中島英輔先輩（高10回）。建設省に30年勤務後、平成5年に当研究所に再就職現在、所長です。写真左は江本平先輩（高21回）。建設省からJICAを経て昨年にこちらに出向、建設機械の開発業務の受託に取り組んでおられます。次に上中央が松尾和己先輩（高31回）。やはり建設省から昨年に来られ、河川や軟弱地盤の改良に関する仕事を担当。「循環型社会の実現に貢献したい」とファイトを燃やしています。

そして、残る写真右が柴藤です。間組に入社、平成13年にこちらに出向し、トンネルの施工計画やコンクリート構造物に関する調査・検討を担当しています。

この不思議なご縁を大切に今後もこのような会を設け、ざっくばらんな話を大いにしたいと思っています。

なんはしょうと

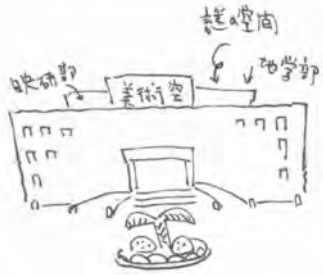
母校の不思議!?発見

演劇部奥 “秘密の部屋” のナゾ解き！

長谷川　法世（高16回）

以前、「週刊文春」に高26回卒の芥川賞作家藤原智美君が、演劇部奥の奇妙な空間と装置について一文を寄せていた。

玄関を入って右の階段を上がり詰めた踊り場が演劇部室で、藤原君はその部室の奥にドアがあって、「そこを開けると巨大なダクトが床から壁に抜けるように通っている一室があらわれた」と書く。そして、空調室なら計器類があるだろうになにもなく、校舎にはそんなダクトを必要とする空調設備などなかった。別の機能を持っているのかとも考えられるが、一度もそいつは音を立てたことがなく、管理のために人が訪れたこともなかった、と続けている。その奇妙な装置と場所について彼が長く抱いていた謎を、僕があっけなく解いてみせるのにはためらいがある。しかし、「東京あさぼらけ」の編集子は、謎は解いてあげなきゃあ、とこともなげに原稿を押しつけるのだった。



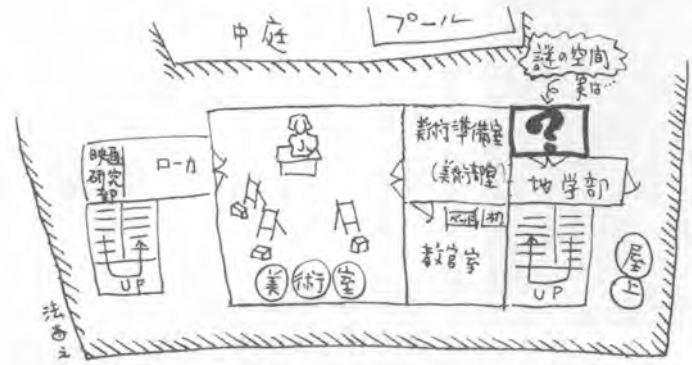
昭和36年度の僕ら16回生の入学式で長敬一郎校長が概略次のようにいわれた。

「諸君は幸運です。板付基地の騒音が問題になっていますが、我が校は君たちの先輩が長く寄付を積み立てたお陰で、防音窓と換気装置が完成し、本年度から使用できることになりました。諸君は寄付なしで、気持ちよく勉学に励むことができるわけです」

福高での新生活が始まった。気温が上がって換気装置の本番というころ、担任の森先生がこういわれた。

「今日から天気の悪い日以外は窓を開けるように。実は、換気装置を動かしてみたら、1カ月で当校の一年分の電気代を使うことがわかりまして。以後換気装置は使えないということになったわけでして…」

藤原君の謎の正体はこんなものなのだ。さらにつけ加えると、僕はその不思議な部屋に侵入した最初の福高生のはずだ。僕は美術部員で、美術準備室の隣が地学部室だった。僕らの卒業後、地学部は部員がいなくなって廃部となったのは風の便りに聞いた。その後、演劇部室となったことを藤原君の一文で知った。



地学部にはしょっちゅう遊びに行った。部長はおとなしい性格だった。僕ら美術部員が屋上で騒いでいるのを校門の辺りから見上げた先生に見つかって、地学部室に逃げ込み、駆け上がってきた先生に、地学部は1カ月閉鎖する、と宣言されてもひとことも反論せず指示に従った。

そういう次第で地学部はデッサンに疲れた美術部員と、それから九大受験組がいつも将棋ばかり打つ休憩所となった。

3年の体育祭が終わったころだったと思う。問題の両開きの扉を、「これはなんのドアや？」と、みんながだんだん気にするようになってきた。そこで、何人かが交代で針金やら釘やらで「黄金の七人」よろしく鍵開けにとりかかったのだった。確か2日がかりで開いたと思う。

そこには脱穀機のような機械があり、はじめなにかはわからなかった。藤原君と同じくみんな狐につままれたようだった。すぐに換気装置だといったのは僕だ。校長の話を思い出したのだった。

だが、換気装置といっても誰も納得しなかった。しかし僕はしっかり記憶していた。それには理由がある。

先輩たちが長く寄付を積み立てたお陰で換気装置が完成した、と校長はいわれた。その先輩達の中には3人の兄姉が含まれていたのだ。僕は4人兄弟の末っ子で、全員が奇跡的に福高に合格した。だから上の3人は在学中授業料といっしょに寄付を払っていたのだった。家計の苦しかったわが家では、末っ子の僕が何かをねだると、「兄ちゃんたちの寄付がかかるもんやけんねえ…」というのが、母のいいわけになっていた。

そんなわけで、僕はわずか1カ月余りしか稼働しなかった換気装置のことをしっかり記憶に残していたのだった。僕の小遣いを無駄遣いしたこの機械を僕は一、二度足でこづいたと思う。

その秘密の部屋は、蝶番の芯棒が外れるように細工して何度かさぼり場所にしたが、地学部や美術部自体が隠れ場所だったので、それさえ用なしになったというお粗末だった。

博多だより

最近「福高事情」

生徒会では初の女性総務が誕生

久保田　勝男（高14回・福高事務長）

母校の事務長に赴任して1年近くが経過しましたが、東京同窓会のみなさんに母校の近況を少しでも知っていただけたらと思いお便りします。

まずは、社会のあらゆる分野でもそうですが、本校でも昭和24年（高2回生入学年）の「男女共学」実施以来、漸次女生徒が増加し、現生徒の男女比は53対47となっています。その上、文武の両面で女生徒の元気が目立ち、好成績を上げています。女子テニス部・女子空手部が全国大会出場の快挙を遂げ、生徒会では初の女性総務（会長）誕生です。

男生徒ガンバレ！　と叫びたくなる心境です。

県立学校では本庁（県教委）に最も近く（平成9年度から青松高校が隣接校として開校）、博多駅や福岡空港に最短距離で、さらに地下鉄駅や都市高速道路の出入り口に最も近く、多分日本で一番交通の便のいい学校ではと思っています。

その利便性から、校長会や各種研修会、外部的には管理職（校長・教頭）試験や大学入試センター試験等の貸し会場などとして大いに県教育に貢献しています。（福岡県立学校132校中で最多利用会場）。

そうした中にあっても勉学の教育環境はすばらしく、洋式建築の本格校舎と、よく手入れされた庭木や黄葉が輝く銀杏並木とのコントラストが素敵な景観を生み出し、それが平成11年度の福岡市都市景観賞を受賞しました（一昨年の「東京あさぼらけ」でも紹介）。

母校は先輩達の良き伝統を継承しつつ、足をしっかり地につけて頑張っています。

最後に、最近数年間の主な出来事をお伝えしますと、

▼平成6年＝女生徒制服のデザインが変更（棒タイがリボンへ。防寒用ベスト着用等）

▼9年度＝創立80周年記念式典挙行

▼10年度＝記念中庭「福高パティオ」完成（設計はスペイン・サグラダファミリア教会主任彫刻家でコーヒーのコマーシャルでもお馴みの25回生外尾悦郎さん）

▼11年＝定時制課程を閉じる

▼12年度＝福高育英奨学会設立（平成13年度23名採用）

▼小林彰氏同窓会長に

皆さんも、帰福の折はぜひお立ち寄りください。きっと懐かしさとともに、かつての現役福高生時代へのタイムスリップを体感できると確信しています。

どんどん来んしゃい！
同窓会総会は４月19日(金)です
――懐かしい恩師の近況も紹介

当番幹事　中村　英樹（高29回）

同窓会の皆様が福中・福高で学ばれ青春を謳歌されていた頃、21世紀にどんな夢を抱いておられましたか。希望に満ちた近代的、平和な世界を夢見る方がほとんどではなかったでしょうか。実際に新世紀がスタートし早や１年がたちましたが、夢とは裏腹に深刻な経済構造不況、米国での多発テロ事件、さらなるアフガンへの報復攻撃、国内での狂牛病騒動など暗い出来事の続いた幕開けでした。

そのような中、見事な演出と運営で大成功に終わった平成13年度の同窓会総会幹事の皆様から今年度総会の幹事役を受けることとなりました。引き継ぎに当たり、先輩方から一つのアドバイスを頂きました。「卒業して20年以上たった今、福高から大きな宿題ばもろうたと思って頑張って下さい」と。その言葉を胸に昨年５月の初会合以来、高９回、高19回の先輩方と若い人の意見も取り入れたいと高39回の方の協力も頂きながら、私たち高29回生を含めた４代が当番幹事として準備を進めております。

さて、そんな大きな宿題を抱えた私たちですが、その答えを求めて各自の思いが飛び交う中、世代の垣根を取り払った意見を交換し、「参加者に懐かしい思い出を提供する会にしたい」というコンセプトが６月の末に決まりました。

それから各人が当時の生徒に戻った気分で心に残る思い出、若い気持ちが燃えたぎった出来事などを語り合ったところ、長年教鞭を執られた名物先生の印象の大きさと、学校全体が一つになり青春の血を熱くした体育祭の素晴らしさを、総会の場で表現したいという気持ちがみんなの意見としてまとまりました。

取材は、高29回で現福高教諭の栗田氏に同期のよしみで大いに甘えつつ続けておりました。今年の同窓会総会では昨年開催された21世紀最初の福高体育祭をご紹介いたします。これからを担う若人の活躍ぶりをご覧になり、エネルギーをもらいましょう。当時の気分を取り戻して頂き、いつも青春である喜びを分かち合いませんか。

現在の学舎やその周辺の移ろいもスライドで紹介しますので、友人との語らいやお酒の肴に一役買うものと思います。

皆様が学生気分に戻った頃、長きにわたってご活躍されてきた我らが恩師の現在のご様子を紹介する予定です。当時、一緒に笑い、悩み、そしていろいろと教えて頂いた先生に久しぶりに怒られる気分を味わえるかもしれません。

福中・福高同窓会のみんな～、待っとうけん遠慮せんでどんどん来んしゃい。

平成13年度総会・懇親会報告
改めて母校のすばらしさを実感

川元　茂（高28回）

今世紀最初の同窓会総会が開かれてから１年が過ぎようとしています。その当番代表幹事は高校８、18、28回でした。

我々28回のメンバーは、卒後25年、母校とはほとんど縁のない生活をしていました（体育会系の人などは別かもしれませんが）。若い頃には自分の足場を確立することに懸命で、過去を振り返る余裕はありませんでした。

しかし不惑を迎え、自分自身を客観化し、周りを見渡すことがようやく少しずつ出来るようになってきた頃、同じ時間、同じ場所で過ごした同級生たちと再会しました（しかし、多くはきちんと会話をしたのは初めて）。先輩方の母校に対する激しい愛着や強い郷愁の念に知らず知らずのうちに感化され、また毎月の打ち合わせの会合でお互いを知り合ううちに、高校時代とは違った新しい関係が生まれました。

「母校のお陰だ」としみじみと感じさせられました。

そんなことで一体感のようなものが醸成され、また先輩方との熱い議論の末、『福高グラフティー唄え21世紀の福高賛歌』という平成13年度の企画が生まれました。

『福高賛歌』は、昭和42年の創立50周年を記念して、一昨年５月に逝去された母校の音楽教諭（当時）の江口保之先生が作曲され、国語科の先生方が合同で作詞されたものです。高校18回で二期会オペラ歌手、山口俊彦氏に歌唱指導をお願いしました。全員で合唱し、楽曲のすばらしさを体験するとともに先生方の当時のご苦労を偲びました。

『福高グラフティ』は、福高や福博の今を映像で伝える企画です。高校28回の写真家、鶴田孝介君の眼を通して見た母校や街並みの様子は、やはり高校28回でコピーライターの益岡由美さんの構成した脚本と音楽、そして高校18回の林田スマさん（元ＲＫＢアナウンサー。総合司会もお願いしました）の柔らかなナレーションによって、懐かしくそして情感あふれるスライドショーになりました。スクリーンの向こうに、それぞれの、あの時のあの場所を感じていただけたのではないでしょうか。

平成13年４月20日、恒例の会場、市ケ谷のアルカディア私学会館には346名もの同窓生にご参加いただきました。

総勢50人以上のスタッフを温かく見守ってくださった先輩方に心からお礼を申し上げます。

最後に、平成14年度の同窓会総会の盛会を祈念しますとともに、これから続く後輩の皆さんにも、母校のすばらしさを実感できる機会に、ぜひ飛び込んでいただければと思います。同窓会の皆さん、どうもありがとうございました。

◇◇編集後記◇◇

◆今回は諸般の事情で作業が遅れがち。しかし、全員の団結で諸問題も解決。故三野会長にお見せできないのが残念。第４号をご霊前に捧げます。（斎藤・高16回）

◆編集に参加していると、いろいろな方の消息が聞けて楽しい。それにしても同じ福高生にこんな人がいたのかと思うほど、思いがけない分野で活躍されているものです。（原口・高15回）

◆個人的に振り返ると、どうも笑いと怒りのバランスが悪かった去年。２００２年は飄々とスゴイことを続ける中村哲医師を少しは見習いたい。（福士・高14回）

◆今号では仕事が忙しく編集委員会になかなか出席できず、他の方にご迷惑をかけてしまいました。今年はホームページに力を入れたいと思っていますので、ご協力を。（加藤・高15回）

◆高２で斜め後ろの席だった藤堂君。高１の時、コーラス部で一緒だった山口君。２人に、こんな素敵な福高時代があったなんて。それから40年近く友情を育んできた２人の仲はうらやましい！　（久能・高18回）

◆編集委員会に欠席が多かったのですが、それでも「原稿はまだか、写真は大丈夫？」など急かされ、心配させながらも充実した日々を送れました。（上田・高22回）